



「高質な田舎」実現に向けたワークショップ開催報告

産官学連携支援に関わる人たちが秋田県の将来について考え、意見を出し合うワークショップが先ごろ秋田市で開催された。県の運営指針である「ふるさと秋田元気創造プラン」に掲げられた「高質な田舎」の実現に向けて、イメージの確認や駆動目標の創出について様々な議論が交わされた。本稿ではワークショップの進め方や内容について、座長である榊純一氏よりご紹介いただいた。

1 開催日

2019年9月10日

2 場所

秋田大学百周年記念館

3 座長

榊 純一氏 株式会社IHI顧問、秋田銀行取締役

4 ファシリテーターとメンバー

(ファシリテーター)

武田 正利氏 株式会社電通国際情報サービス 執行役員
株式会社ISIDエンジニアリング 代表取締役社長

(メンバー)

田 沼 唯 士 氏 帝京大学 戦略的イノベーション研究センター 教授

鈴 村 美代子 氏 明治大学 商学部 助教

吉 田 夕貴夫 氏 株式会社ISIDエンジニアリング 機能エンジニアリング1部長

鈴 木 貫 太 氏 株式会社電通国際情報サービス 金融ソリューション事業部
アソシエイトマネージャー

佐 藤 公 之 氏 株式会社電通国際情報サービス 金融ソリューション事業部

5 参加者

秋田大学、秋田県立大学、秋田県庁、秋田銀行、秋田経済研究所より16名



「高質な田舎」実現に向けた ワークショップの開催

榊 純一

(IHI顧問、秋田銀行取締役)



1 ワークショップの開催にあたって

最初に、このワークショップを開催することの背景について少しお話しします。

ワークショップは9月10日に秋田大学百周年記念館で開催されましたが、丁度同じ時期に日本機械学会の年次大会が秋田大学キャンパスで開催されていました。我々はその年次大会の「少子高齢化を支えるテクノロジーの提案」というセッションで2つの講演を行いました。その中で述べていることは、「日本の産業構造は『大量生産』から『質』に変わってきた。すなわち、ものづくりの効率化ばかりが前面に出た高度成長期とは明らかに異なる新たな価値観のあり方を探求していくパラダイムシフトが生じている。そのため、これからは持続可能な社会を実現するために、地球のトータルエネルギーの有効利用を考えることが重要になる。少子高齢化を前提とした『高質な田舎』の実現を打ち出した秋田県のプランは、その一つの方向を示している。勿論、第2次産業に対する機械工学の貢献はこれからも変わらないが、より広い領域で、機械工学の考え方の神髄である『目標の明確化』と『原理・原則を正確に把握すること』によって、今後の社会の発展への更なる寄与が可能である。」⁽¹⁾⁽²⁾ という提案をしました。

「高質な田舎」の実現に向けた具体的な行動計画を機械工学の観点から検討してみたいとい

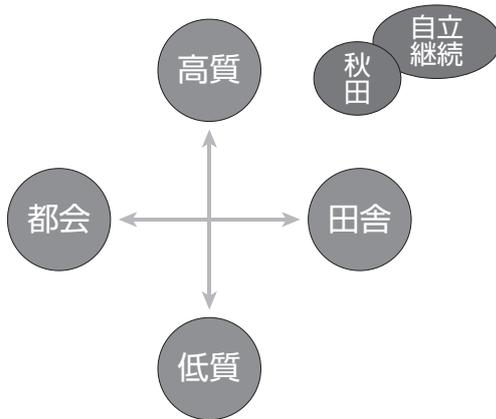
う思いから、このワークショップを計画したものです。

2 「高質な秋田」のイメージとは

作業を始める前に、「高質な秋田」とはどのようなイメージなのかを確認しましょう。

一番分かり易いのは、佐竹秋田県知事が「第2期ふるさと秋田元気創造プラン」の巻頭で述べられている次のフレーズだと思います。「秋田には、田舎であればこそ、地方であればこそその強みもあります。豊富な山菜はまさに自然の恵み、これをふんだんに食することができるのは大きな贅沢であり、美しい田園風景や郷土色あふれる多彩な文化・芸術は、都会にはない価値を見いだすことができ、(中略) 都会人にはあこがれに映るのではないのでしょうか。(中略) 広大で豊かな自然空間、文化レベルの高さ、多彩な食文化、高度で多様な産業技術、加えて素朴な中にも教養あふれる県民、まさに我がふるさとに『高質な田舎』を思い描きつつ、経済的な側面だけでは測れない、潤いと真の豊かさを実感できる」⁽³⁾。この説明は先ほども述べたように、秋田の特長を生かして、高度成長期とは明らかに異なる新たな価値観のあり方を探求していく姿勢です。これを図で表すことは難しいのですが、あえて2つの対立軸でイメージを作ってみると図表1のようになります。

図表1 「高質な秋田」のイメージ



3 ワークショップの参加メンバー

ワークショップの参加メンバーは、秋田大学、秋田県立大学、秋田県庁、秋田銀行（含む秋田経済研究所）の4団体からそれぞれ4名にご参加いただき、所属がダブらないように4グループを編成しました。

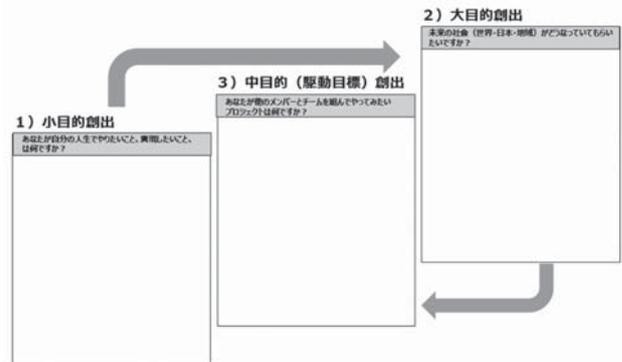
4 ワークショップの進め方

機械工学の神髄として述べた「目標の明確化」ですが、これは「駆動目標（ムーンショット）」と言い換えることができます。「ムーンショット」とは1961年に故ケネディ大統領が唱えた月面着陸計画に由来しますが、「困難だが夢があり、明確で社会的意義のある期日が明示された目標」を指します。当時の米国の宇宙技術は地球を周回する有人衛星を実現する前の弾道飛行が成功したレベルでしたが、1960年代に月面着陸を実現させるという目標を明示することで、全関係者を一丸となって目標達成にまい進させる環境を作り出しました。加えて、ワクワク感を醸成することで、この目標にあこがれて参加する仲間も増えました。

このワークショップは目的工学アプローチに基づくもので、「高質な秋田」の実現に向けた

「駆動目標（ムーンショット）」を作る作業を進めました⁽⁴⁾。その時に使用した「目的の三階層構造シート」を図表2に示します。

図表2 駆動目標抽出のための「目的の三階層構造シート」



紺野登, 目的工学研究所, “目的工学によるイノベーション実践手法”, 翔泳社, 2018年の第5章から引用

これを印刷した模造紙を用意して、2030年を目指して、小目的の創出⇒大目的の創出⇒中目的（駆動目標）の創出という手順に従い、各メンバーの思いを付箋に書き込み、それを模造紙に貼り付けていきました。

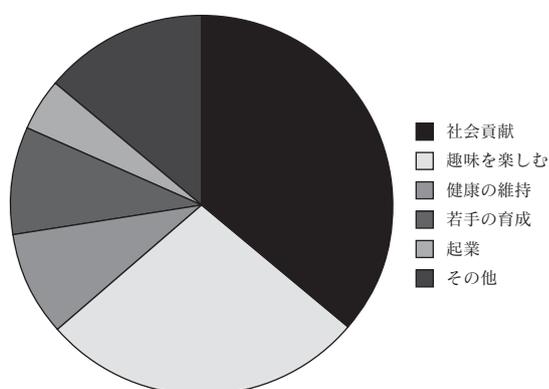
- ① 小目的の創出
「あなたが自分の人生でやりたいこと、実現したいことは何ですか？」
- ② 大目的の創出
「高質な田舎を実現できたとして、秋田県はどうなっていてもらいたいのですか？」
- ③ 中目的（駆動目標）の創出
「あなたが他のメンバーとチームを組んでやってみたいプロジェクトは何ですか？」

5 実際の作業

(1) 小目的創出

ここでは2030年頃に実現したい個人の思いを書いてもらいましたが、「祭り、郷土料理、温泉めぐり」、「実家の畑を拡大して観光農園を作る」などの趣味を楽しみたいということを上回る割合で、「若手への教育や就業支援」、「高齢者の独り暮らしへの支援」、「地域の暮らしを豊かにする小さな起業」などの社会貢献活動の割合が一番でした。

図表3 小目的創出のまとめ



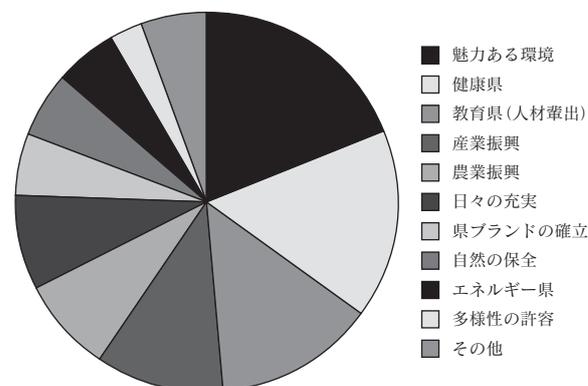
(2) 大目的創出

ここでは2030年頃の秋田県がどのようになっているかを探りましたが、小目的創出の時とは違って、各個人の持つイメージが細かく分かれました。1番は「高齢者が安心して暮らせる街」、「自然や文化にマッチした健康的な生活」というような、住みやすく魅力ある環境が整っていることが挙げられました。住みやすいという概念は少し抽象的ですが、2番目からは具体的な秋田県の姿を現す意見が出ました。

2番目は「健康に暮らすための(介護も含む)医療が整っている県」、3番目は「県内に限らず、県外にも人材を輩出する教育県」、4番目

が「世界に通用する、若者が就職したいと思う企業が増えている姿」、5番目が「食に関する農業の先進地域」という思いでした。

図表4 大目的創出のまとめ

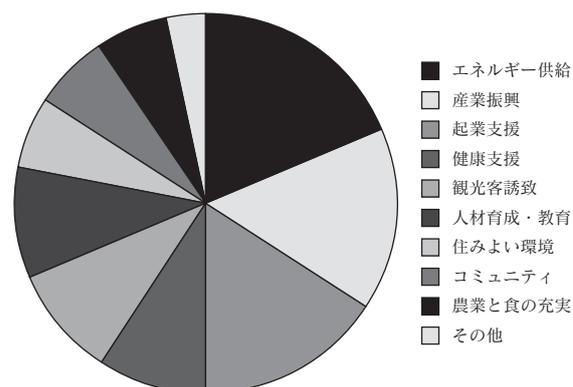


(3) 中目的(駆動目標)創出

駆動目標は、実現したら自分がワクワクできる、面白そうなプロジェクトを考えてもらうことです。

結果を見ますと、「エネルギー供給」、「産業振興」、「起業支援」、「健康支援」、「観光客誘致」「人材育成・教育」の順番になっています。

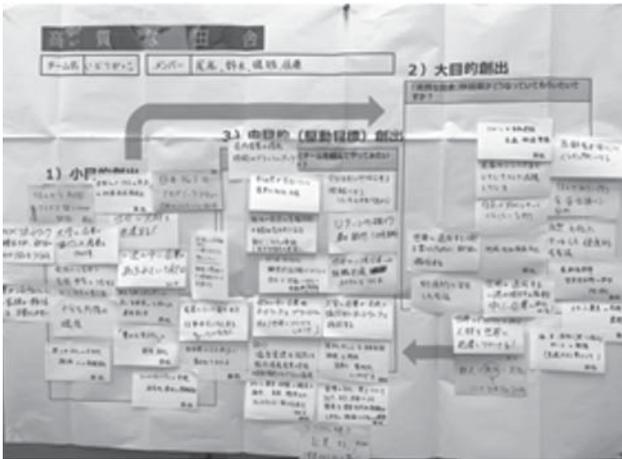
図表5 中目的(駆動目標)創出のまとめ



小目的から大目的に進み、最後に中目的(駆動目標)に戻ってきましたが、自分が主体的に関与できるプロジェクトは何かを考えることで、秋田が持っているポテンシャルの中で、まだまだ活用できていない分野が駆動目標として出て

きたように考えられます。「エネルギー供給」については、風力や地熱などの資源に恵まれて再生可能エネルギーに関しては日本の先進地区の一つであるにもかかわらず、その利用方法が明確でないことが挙げられており、再生可能エネルギーやCO₂の削減に敏感なGAFA(Google, Amazon, Facebook, Apple)のような企業の誘致や、再生可能エネルギーだけを使用するEVを活用したモビリティネットワークの整備なども話題になりました。

図表6 グループ発表時の例



6 まとめ

今回のワークショップの目的の一つに、参加者が所属する組織を超えて秋田の将来について議論する場を作りたいかあったということがありました。それはある程度達成できたと考えます。

更に今回の議論の中で参加者の柔軟性を感じる場面もありました。例えば、①高齢化を悲観的に見るのではなく、これを通して高齢化医療の先進県になることや、②県内の大学卒業者が県外に就職していくことを嘆くのではなく、日本社会のレベルアップに貢献する人材輩出県として誇りを持つべきであることや、③Uターンによって定住人口を増やすことに縛られず、「首

都圏で働きつつ、秋田で時々働く」という新たなモデルケースもあるのではないかと、というような発想です。

全体で90分という限られた時間でしたが、参加した方々にはかなり濃密な時間ではなかったかと感じます。今後は、例えば中学生や高校生をメンバーとしたワークショップを開き、将来の秋田県の担い手として自身が何をしたいのか、何をすべきなのかという議論が出来れば面白いと考えます⁽⁵⁾。

今回のワークショップを共催いただきました秋田大学理工学部、秋田銀行、秋田経済研究所に感謝いたしますと共に、参加いただきました秋田県庁と秋田県立大学にも厚く御礼申し上げます。

参考文献

- (1) 榎、田沼、鈴木、羽山、武田、吉田、“少子高齢化を支える機械系ものづくり産業振興の試案”、日本機械学会2019年年次大会 講演論文集 S40106
- (2) 田沼、榎、鈴木、羽山、武田、吉田、“少子高齢化を支える機械系ものづくり生産性向上技術と教育の提案”、日本機械学会2019年年次大会 講演論文集 S40107
- (3) 秋田県 “第2期ふるさと秋田元気創造プラン”、平成26年3月
- (4) 紺野登、一般社団法人FCAJ・目的工学研究所、“目的工学によるイノベーション実践手法”、翔泳社、2018年
- (5) 秋田魁新報、“本県産業の将来議論 秋田市でワークショップ”、2019年9月13日、朝刊